

2009年5月28-30日に開催された第57回日本輸血・細胞治療学会社員総会にて当学会の理事長に再任されました。2007年に斯界職に就いて以来、先人が蒔いた輸血医学の種を立派に育成することが私に与えられた任務と認識して、働いてまいりました。4000名の会員からなる当学会をさらに輸血医学と細胞治療医学から成る医療体系として大きく育て、社会に役立てるよう発展させるべく、ここにこれから2年間の学会運営方針を表明します。

1. 輸血医学・細胞治療医学の科学性

輸血治療はこれまでの「経験と勘」に頼ったものから「科学性に裏打ちされた」臨床医学として確立し、その成果は着実に患者に還元されてきました。日本からも世界的に貢献できる業績がもっと挙がるように応援し、各種ガイドライン類もエビデンスのもとに作成されることを期待しています。当学会の良き伝統でもありますが、自由にかつ建設的に批判することが前向きに作用することが重要です。

2. 国際性への展開

アジア人の抗原特異性や頻度は白人とは異なり、同種免疫応答、輸血反応も当然異なる性質があり、その結果、移植分野、母子免疫、臨床輸血医学も独自の発展の可能性を帯びます。国際輸血学会Asia Oceania region と連携を図り、新たな分野に切り込んでいく挑戦をしたいと考えます。

3. 学会収入増加と透明性の確保

学会には種々の活発な活動が不可欠です。しかし、赤十字血液センターの間借り状態から事務所の独立、事務員の独自雇用、法人化に伴う税金の納付、税理士・社労士への支払いなどの支出増加のため、最近では年間700万円前後の支出超過が続いています。支出をセーブし、会員の増加など収入を増加させるよう努力しなくてはなりません。また、情報の共有は会員相互の信頼を醸成して、会の発展に必須な根本と信じます。

4. 関連学会などとの相互信頼関係

輸血・細胞治療医学は免疫学、微生物学、薬学、疫学、止血血栓学、移植免疫学など多くの智慧が結集された総合医学の要素が濃く、関連学術団体との共同企画、相互のシンポジウムなど医学進歩の成果をこの領域に還元してゆく作業として、学会を挙げて提案していきます。また、会員の職種も病院医師だけでなく、検査技師、看護師、薬剤師、事務系まで含み、職域を超えた有機的な集合体を形成しています。認定検査技師、学会認定自己血看護師、危機的大量出血対応ガイドライン、宗教的輸血拒否への対応ガイドラインなど輸血医療の安全性向上に大きく貢献したものと評価されています。看護師の臨床輸血医学への正しい関与と教育訓練は我々の責務でもあります。

今年度は学会の各種委員会を大幅に改組して、意欲に富んだ有用な人材が、活躍貢献できる場として設計しました。日本輸血・細胞治療学会の分野で貢献したいと思われる方が居られたら自ら名乗り出られることも歓迎します。

輸血・細胞治療医学をともに発展させていくことができるように先頭に立って全力を尽くす覚悟です。